



SUMIDA
TRIPHONY
HALL

Sumida Triphony Hall Presents

[今後の公演]

トリフォニーホール・プラス2017

■ ブラック・ダイク・バンド

11月5日(日)15:00開演

ニコラス・チャイルズ[首席指揮者・音楽監督]

一般¥5,000/学生¥2,500



スーパー・ソリスト meets 新日本フィル

■ ウィーン=ベルリン ブラス・クインテット & 新日本フィルハーモニー交響楽団

12月21日(木)19:00開演

下野竜也[指揮]

S¥7,000/A¥5,000/B¥3,000/学生各20%引

※アンサンブル・ウィーン=ベルリンとの
セット券 S¥12,800



■ アンドレアス・オッテンザマー & ヴィンタートゥール・ムジークコレギウム

11月29日(水)19:00開演

S¥7,000/A¥5,000

主催・お問合せ:

ヒラサ・オフィス 03-5429-2399



©Karja Rago/Decca

●お問合せ・お申込み:トリフォニーホールチケットセンター(10:00-18:00)

Tel.03-5608-1212 www.triphony.com



ホール公式 Twitter @TriphonyHall #STriH



公式フェイスブック facebook.com/SumidaTriphonyHall



2017年10月3日(火)19:00開演
主催・企画:すみだトリフォニーホール
協力:(株)ヒラサ・オフィス
(公財)新日本フィルハーモニー交響楽団

平成29年度文化庁
劇場・音楽堂等活性化事業 文化庁

すみだトリフォニーホール

カール・マリア・フォン・ウェーバー (1786–1826)
Carl Maria von WEBER
ファゴット協奏曲 へ長調 作品75
Bassoon Concerto in F Major Op.75

カール・シュターミッツ (1745–1801)
Carl STAMITZ
クラリネット協奏曲第7番 変ホ長調
(ダルムシュタット協奏曲第1番)
Clarinet Concerto No.7 in E Flat Major (Darmstädter No.1)

リヒャルト・シュトラウス (1864–1949)
Richard STRAUSS
オーボエ協奏曲 ニ長調 AV144
Oboe Concerto in D Major AV144

—— 休憩 Intermission ——

カール・ニールセン (1865–1931)
Carl NIELSEN
フルート協奏曲 FS119
Flute Concerto FS119

リヒャルト・シュトラウス
Richard STRAUSS
ホルン協奏曲第2番 変ホ長調 AV132
Horn Concerto No.2 in E Flat Major AV132

アンサンブル・ウィーン＝ベルリン
Ensemble Wien-Berlin

フルート：カール＝ハインツ・シュッツ
Karl-Heinz SCHÜTZ, flute
オーボエ：ジョナサン・ケリー
Jonathan KELLY, oboe
クラリネット：アンドレアス・オッテンザマー
Andreas OTTENSAMER, clarinet
ファゴット：リヒャルト・ガラー
Richard GALLER, fagotto
ホルン：シュテファン・ドール
Stefan DOHR, horn

指揮：ハンス・イェルク・シェレンベルガー
Hansjörg SCHELLENBERGER, conductor
新日本フィルハーモニー交響楽団
New Japan Philharmonic

佐伯茂樹 (音楽評論)

今から2年前の2015年7月13日、メンバーが一新したアンサンブル・ウィーン＝ベルリンが来日して、すみだトリフォニーホールでコンサートを行っています。通常の彼らのコンサートは、木管五重奏曲を中心としたプログラムが組まれますが、この日は違いました。

5人のメンバーがそれぞれモーツァルトの協奏曲を披露したのです。それも、この団体のOBであるハンス・イェルク・シェレンベルガーが指揮する新日本フィルハーモニー交響楽団の伴奏で。ベルリン・フィルやウィーン・フィルの名手たちのモーツァルトを聴くことができるという、まさに夢のような一夜でした。

そして、今宵その第2弾としてモーツァルト以降の協奏曲が披露されます。いずれもモーツァルトの作品を意識したものばかりなので、その点に着目して鑑賞すると面白いかもしれません。

ウェーバー：
ファゴット協奏曲 へ長調 作品75

ドイツ・ロマン派初期の作曲家カール・マリア・フォン・ウェーバー (1786–1826) が、1811年にミュンヘン宮廷楽団のファゴット奏者ゲオルク・フリードリッヒ・プラントのために作曲した協奏曲。ウェーバーは同じ年に、同じ楽団のクラリネット奏者ハインリヒ・ベールマンのために作曲したクラリネット協奏曲第1番が大成功したので、それに続くものとして書かれました。ちなみにウェーバーは、プラントのた

めにもう1曲協奏曲を作曲しようとしたましたが断念して、かわりにヴィオラと管弦楽のために書いた《アンダンテとハンガリー風ロンド》をファゴットと管弦楽用に編曲しています。結局、当初は第1番という番号が付けられたものの、これがウェーバー唯一のファゴット協奏曲になりました。モーツァルトの作品と並んで、ファゴット協奏曲の重要なレパートリーとして重宝されています。

曲は、リズムカルで伸びやかなパッセージが繰り返されるアレグロ・マ・ノン・トロポの第1楽章、3/8拍子でしっとりと歌うアダージョの第2楽章、ファゴットの広い音域を駆け巡るロンドの第3楽章の3つの楽章から成ります。

C.シュターミッツ：
クラリネット協奏曲第7番 変ホ長調
(ダルムシュタット協奏曲第1番)

古典派時代、ドイツ南西部の都市マンハイムでは、この地に宮廷を置いた選帝侯カール・テオドルが私財を投じて優秀な音楽家を集め、優れたオーケストラを結成していました。当時はまだ珍しかったクラリネットも編成に加わっており、ボヘミアから出稼ぎに来てこの地で活躍したシュターミッツ家の長男カール・シュターミッツ (1745–1801) は、11曲ものクラリネット協奏曲を作曲しました。この第7番は、カールがマンハイムからパリに移り住んだ時期 (1771～76) に作曲されたもので、おそらく、同時期にパリに移り住んでクラリネットのヴィルトゥオーゾになったボヘミア出身のヨーゼフ・ペーア (1744–1812) との交流によって生み出されたと考えられています。

曲は、パリのギャラント様式を感じさせるアレグロ・モルトの第1楽章、クラリネット独奏の保続音から開始する美しいアダージョの第2楽章、軍楽隊のパッセージも現れるロンドの第3楽章の3つの楽章から成り、古典派時代の典型的な協奏曲のフォームで書かれています。モーツァルトの協奏曲が低音域を拡張したA管のために書かれたのに対して、この曲では、明るい音がするB管の美しい音域を上手に使っています。

R.シュトラウス： オーボエ協奏曲 ニ長調 AV144

交響詩やオペラの名作を数多く生み出したドイツ後期ロマン派の作曲家リヒャルト・シュトラウス（1864-1949）が、最晩年の1945年に作曲した協奏曲です。戦後まもなく、シュトラウスは祖国ドイツが爆撃によって焦土と化したことに憔悴し、山荘に引き籠もっていたのですが、ピッツバーグ交響楽団のオーボエ奏者だったアメリカ軍軍曹のジョン・デ・ランシー（帰国後、フィラデルフィア管弦楽団首席奏者を長年勤めました）がシュトラウスのもとを何度も訪れてオーボエ協奏曲を作曲するように懇願。その時は断っていたけれど、結局は心が動いて書き上げたのがこの曲なのです。

晩年のシュトラウスは、十代の頃に芽生えたモーツァルトに対する憧憬の気持ちが強まっており、このオーボエ協奏曲もシュトラウスらしいロマンティックな楽想に溢れながらも、古典派的な美しさや愉悦感を感じることができます。

曲は、オーボエ独奏が自由に歌うアレグロ・

モデラートの第1楽章、しっとりと回想するようなアンダンテの第2楽章、陽気で明るいヴィヴァーチェ・アレグロの第3楽章の3つの楽章から成り、楽章間は切れ目なく演奏されます。

ニールセン： フルート協奏曲 FS119

デンマークの作曲家カール・ニールセン（1865-1931）が、1926年に作曲した協奏曲です。ニールセンは1921年に、コペンハーゲン管楽五重奏団のメンバーによるモーツァルトの協奏交響曲のリハーサルを耳にして彼らの演奏に惚れ込んで、すぐに木管五重奏曲を作曲しました。それだけではなく、彼は5人のメンバー1人ずつに協奏曲を書くことを約束して、最初にフルート担当のホルゲル・ギルベルト＝イエスベルセンのためにこの曲を書きました。ニールセンは、フルート協奏曲の2年後の1928年にクラリネット協奏曲も書き上げましたが、他の楽器のための協奏曲には着手することなく、1931年に亡くなってしまいます。

このフルート協奏曲は、ソナタ形式らしきアレグロ・モデラートの第1楽章と、アグレッツの前半とアダージョ・マ・ノン・トロツポの後半で構成される第2楽章の2つの楽章から成りますが、その構成や調性の転換は極めて自由で幻想的です。オーケストラの編成は、フルートとトランペットを欠いていて、各楽器が室内楽のようにフルート独奏と絡みます。とりわけ目立つのは、バストロンボーン。第2楽章の終結部では、この時代に流行したトロンボーンのグリッサンドが多用され、賑やかな雰囲気演出します。

R.シュトラウス： ホルン協奏曲 第2番 変ホ長調 AV132

リヒャルト・シュトラウスが第2次世界大戦中の1942年に作曲したホルン協奏曲です。彼は、この曲の前にもう1曲ホルン協奏曲を書いていますが、第1番の方はシュトラウスが18歳のときに書いた作品で、本日演奏する第2番とは60年もの隔たりがあります。第1番はホルンの名手だった父フランツの還暦を記念して書いたもので、自然倍音で合図をする「ホルン信号」的なパッセージが中心でしたが（フランツ自身はB管のヴァルヴホルンを愛用していました）、第2番はヴァルヴホルンならではの細かいパッセージと難易度の高い跳躍が要求されます。両者の間に60年の技術の発展があるから当然なのでしょうけれど、シュトラウスはさまざまな経験を経た年齢になって、もう一度、モーツァルトに比肩し得るホルン協奏曲を書こうと思ったのかもしれません。

曲は、独奏ホルンのファンファーレで開始し、自由で明るく変化していくアレグロの第1楽章、舟歌のような穏やかな旋律が紡ぎ出されるアンダンテ・コン・モートの第2楽章、モーツァルトと同じ6/8拍子の狩猟のリズムで書かれているロンドの第3楽章の3つの楽章から成り、第1楽章と第2楽章の間は切れ目なく演奏されます。



©Karlsky

アンサンブル・ウィーン＝ベルリン

Ensemble Wien-Berlin

1983年にウィーン・フィルハーモニー管弦楽団とベルリン・フィルハーモニー管弦楽団から集う桁外れのソリスト5人、シュルツ（fl／ウィーン・フィル）、シェレンベルガー（ob／ベルリン・フィル）、ライスター（cl／ベルリン・フィル）、トルコヴィッチ（fg／ウィーン響）、ヘーグナー（hr／ウィーン・フィル）によって設立され、「スーパーアンサンブルの誕生」と熱狂的な喝采をもって世界中の音楽界から迎えられた。以来、メンバーを徐々に変更しながら活動が続けてきたが、2013年に30周年を迎えたのを機に、ザルツブルク音楽祭、ウィーン、ベルリンでの演奏をもって、最後の創立メンバーであったシェレンベルガーが引退。完全に若返る形で、新生アンサンブル・ウィーン＝ベルリンとして新たな船出をした。

現在のメンバーは、カール＝ハインツ・シュッツ（fl／ウィーン・フィル）、ジョナサン・ケリー（ob／ベルリン・フィル）、アンドレアス・オッテンザマー（cl／ベルリン・フィル）、リヒャルト・ガラー（fg／ウィーン響）、シュテファン・ドール（hr／ベルリン・フィル）で、新生アンサンブル・ウィーン＝ベルリンとして初となる2015年7月の日本ツアーは大成功を収めた。

新しい感性と卓越したテクニックで、これまでにない更なるレパートリーの拡大にも力を注ぎ、木管五重奏の新境地を開拓している。



カール＝ハインツ・シュッツ [フルート]

Karl-Heinz SCHÜTZ, flute

オーストリア生まれ。オーレル・ニコレらに師事。カール・ニールセン国際フルート・コンクールなどで優勝。ウィーン交響楽団首席フルート奏者などを歴任。客演奏者としてバイロイト祝祭管弦楽団などに客演。ソリストとしてもさまざまなオーケストラと共演、好評を博す。またウィーン・リング・アンサンブルや、アンサンブル・ウィーン＝ベルリンのメンバーとしても活躍。ウィーン国立歌劇場管弦楽団の首席ソロ・フルート奏者、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団ソロ・フルート奏者。ウィーン・コンセルヴァトリウム音楽大学のフルート科教授。



©Katja Ruge/Decca

アンドレアス・オッテンザマー [クラリネット]

Andreas OTTENSAMER

オーストリア生まれ。幼少期よりピアノ、チェロを学び、2003年クラリネットに本格的に転向、ヨハン・ヒントラーに師事。世界の檜舞台でソリスト、室内楽奏者として活躍。2009年ハーバード大学在学中、カラヤン・アカデミー入学。ベルリン・ドイツ交響楽団首席奏者を経て、2011年、弱冠21歳にしてベルリン・フィルハーモニー管弦楽団首席奏者に就任。2017年2月、名門デッカと専属レコーディング契約を結ぶ。また、ウィーン・フィル首席クラリネット奏者の父エルンスト、兄ダニエルと共に“ザ・クラリノッツ”としても来日した。



©Monika Rittershaus

シュテファン・ドール [ホルン]

Stefan DOHR, horn

ドイツ生まれ。1985年フランクフルト・オペラ管弦楽団の首席ホルン奏者に就任、2年後にはバイロイト音楽祭管弦楽団、その後ニース・フィルハーモニック管弦楽団、ベルリン放送交響楽団にて首席を歴任。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団には1993年より首席ホルン奏者として就任。また、ソリストとして、さらにベルリン・フィル団員との数多くのアンサンブルのメンバーとして活動するほか、ハンス・アイスラー音楽大学およびカラヤン・アカデミーで指導も行っている。



©三浦興一

新日本フィルハーモニー交響楽団

NEW JAPAN PHILHARMONIC

1972年、指揮者・小澤征爾のもと楽員による自主運営のオーケストラとして創立。1997年よりすみだトリフォニーホールを本拠地とし、同ホールで日常の練習と公演を行う日本初の本格的フランチャイズを導入。定期演奏会などで高い評価を得る一方、学校・各種施設などでの地域に根ざした演奏活動も特徴的。1999年、小澤征爾が桂冠名誉指揮者就任。2016年9月、上岡敏之が音楽監督に就任。



ジョナサン・ケリー [オーボエ]

Jonathan KELLY, oboe

イギリス生まれ。ケンブリッジ大学で歴史学を学び、ロンドンの王立音楽アカデミーとパリ国立高等音楽院でオーボエを学ぶ。バーミンガム市交響楽団首席オーボエ奏者を10年間務めた後、2003年ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団首席オーボエ奏者に就任。また、ソリストとして定期的にベルリン・バロック・ゾリステンと共演を続け、CDの録音も積極的に行っている。シャルーン・アンサンブル・ベルリンとも頻繁に共演、ツェルマット音楽祭では、演奏者としてだけでなく、講師として教育活動にも参加している。



リヒャルト・ガラー [ファゴット]

Richard GALLER, fagotto

オーストリア生まれ。1987年9月よりウィーン交響楽団の首席奏者を務めているほか、ブラードのパプロ・カザルス音楽祭、札幌のバシフィック・ミュージック・フェスティバル (PMF) など著名な室内楽音楽祭に定期的に出演。2010年よりウィーン室内合奏団のメンバーとなり、ソリストとしても世界各地で活躍するかたわら、1997年から2004年にはザルツブルク音楽院教授、2004年3月からはウィーン国立音楽大学教授として後進の指導にもあたっている。



ハンスイェルク・シェレンベルガー [指揮]

Hansjörg SCHELLENBERGER, conductor

13歳からオーボエを始め、ミュンヘンとデトモルトにおいてオーボエ、指揮法を学ぶ。ケルン放送交響楽団のソロ・オーボエ奏者を経て、1980年から2001年夏までベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のソロ・オーボエ奏者を務める。退団後は、指揮者、ソリスト、教育者として世界各地で活躍。2012年、2016年にはカメラータ・ザルツブルクを率いて日本ツアーを成功させた。現在、岡山フィルハーモニック管弦楽団首席指揮者、国際オーボエコンクール・軽井沢審査委員長、ソフィア王妃高等音楽院教授を務める。



2015年7月13日、すみだトリフォニーホールにて ©三浦興一